

こしえるびと

つむぐストーリー vol.122

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。
“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”の
メッセージをシリーズで紹介していく。

南国植物の魅力に引かれ

冬の寒さを感じさせない温室の中、
ぎっしりと置かれた南国フルーツや多
肉植物。千葉一男さんは、生育を確認し
ながら優しいまなざしを見せる。

高校生の頃に読んだ図鑑をきっかけ
にサボテンや多肉植物の魅力に引かれ、
栽培を始めた。高校卒業後、地元の人
業に就職してからも興味は尽きず、そ
の後もさまざまな多肉植物の種を購入
し、育て続けた。手元には植えてから
50年経過したものや高価な品種もある。
温室は冬の寒さから植物を守るために
自作。家の裏山から伐採してきた木材
や竹を使い、なるべく経費をかけずに
建設したハウスや温室は合わせて4棟。
大きくはないが、温度管理ができるよ
うにしている。

東北の地でバナナの栽培に挑戦

バナナの栽培は、10年ほど前に通信

販売で苗を購入して始めた。最初に購
入した「ドワーフモンキーバナナ」は、

寒さに弱いが高さ1メートルほどで花が咲き
実のなる矮性品種。ハウスに植え、冬囲
いをしたが、春に冬囲いを外すと枯れて
しまっていた。その後、栽培や品種を調
べ、食用で寒さに強い「アイスクリム
バナナ」に注目した。しかし、寒さに強
い品種は大型で、すぐにハウスに収まら
なくなるほど大きくなった。サイズを整
えるため切り戻すと花は付かず、ハウス
での栽培を断念。ある時、バナナの根が
サトイモに似ていることに気付き、春か
ら秋は露地に植え、冬は種イモを貯蔵
するように掘り起こし、保温したハウス
で越冬させると、枯らすことなく冬越し
できた。2022年に念願の初収穫。そ
の後、3年連続でバナナの収穫に成功し
ている。完熟したバナナは、スーパーで
購入したものよりおいしく、地域の人た
ちにも配り、家族と一緒に味わった。

地元を笑顔にしたい

千葉さんのハウスには、バナナの他、
レモンやパッションフルーツなどの南国
フルーツが所狭しと植えてある。「バナ
ナや南国フルーツが岩手でも栽培でき
れば、安く買えるようになる」という
未来を思い描き、バナナの栽培に挑戦
している人の手助けをしていきたいと
考えている。バナナの栽培仲間は徐々に
増え、ネットワークも広がっている。

長年栽培してきた多肉植物は近年愛
好者が増え、5年ほど前から地元の市
民センターで寄せ植え講習会の講師も
務めている。自ら増やした多肉植物を
使い、育て方のポイントなどを指導し、
喜ばれている。

いずれは、地元東山町松川で開かれ
る「どんこ市」や「まつが市」でバナナ
を販売したいと意気込む。「バナナの栽
培を通じて、地元を盛り上げたい」。思
いを胸に千葉さんは挑戦を続ける。

南国フルーツの栽培を東北の地で

東山町松川 千葉一男さん



PROFILE

千葉一男さん (71)

Kazuo Chiba

東山町松川

1953年東山町松川生まれ。地元企業に勤めながら、趣味でサボテンや多肉植物を栽培。10年ほど前からはバナナなど南国フルーツの栽培を始め、冬越しの研究を重ねている他、多肉植物の寄せ植え教室の講師を務める。水稲5㍏。妻、子、孫の4人家族。

